

時代を駆ける：土井香苗 / 1 人権侵害を調べ、知らせ、変える

KANAE DOI

< 04年4月、日本人3人がイラクで武装グループに拘束される事件が起きた。犯人側は「自衛隊撤退」を要求、日本国内では3人の「自己責任」を問うバッシングが起きた。解放・帰国から約2週間。東京・霞が関の弁護士会館で、ジャーナリストの郡山総一郎さんら2人が約300人の報道陣の前で記者会見した。この時、司会を務めたのが弁護団の一員だった28歳の土井さんだ >

フラッシュのまぶしさを思い出します。郡山さんが「危険を承知で、真実を知らせるのが仕事」と語ったことも。弁護団は、報道対応、支援署名集め、家族のケアに取り組んでいました。首相官邸の世論誘導に驚きました。自衛隊派兵で世論が二分されていた時の撤退要求。国家の一番の急所を突かれると、本気で反撃することを知りました。怖いと感じました。

< こうした“人権派”としての活躍の延長上に昨年4月、アムネスティと並ぶ国際人権擁護の非政府組織（NGO）「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」（HRW、本部・米ニューヨーク）の東京オフィスを開き、日本代表に就いた。HRWは世界80カ国に、法曹関係者やジャーナリスト出身者を含むフルタイムのスタッフ約280人を抱え、各地の人権侵害を、被害者に代わり告発してきた >

イラクで拘束された3人がやろうとしたこと（真実を伝え、弱者を助ける）と、HRWの仕事は似ているところがあります。人権侵害を調べ、知らせ、変化をもたらすことです。東京オフィスは「変化をもたらす」アドボカシー、つまり政策提言、ロビー活動、資金作りを担っています。

例えばこの1年、スリランカ問題に力を入れてきました。昨年5月の内戦終結後、同国政府は少数民族タミル人の国内避難民25万人以上を、汚物の散らばる過密なキャンプに拘束する悲惨な実態がありました。日本政府は、多額のODA（政府開発援助）を供与している国を批判しません。

< HRWは世界人権宣言（1948年）に基礎を置いて活動している。宣言は人権を「すべての人民とすべての国とが達成すべき共通の基準」だとうたう。日本人は人権意識が低いのだろうか >

世界人権宣言を具体化した国際人権規約を日本は批准しました。人権は政治決定とは無縁です。殺されない、恣意（しい）的に逮捕されない、性別や政治信条で差別されない、表現の自由など、国家が奪ってはならない、人間が人間であるために必要な最低限の権利です。私たちはそれを見張ります。（HRWの活動を）加害者の“痛み”に直結させなければなりません。

日本人は何が起きているか、知らないだけです。スリランカのように、お金を出して結果的

に人権侵害に手を貸していることを。拷問や拉致など具体例を話せば、「へー」と思ってもらえます。被害者は「なぜ日本は黙ってお金を出すのか」と悲しんでいます。だから実態をどんどん知らせていきます。

< H R Wの加害者追及を支えるのは、客観的かつ徹底した調査だ >

専門家が集めた、人権という視点に貫かれた独自の現場情報が強みです。例えば昨年9月26日、タミル人収容キャンプで、収容者と軍が衝突した。当局は「収容者は、テロリストと関係があった」と説明しましたが、H R Wは匿名の目撃者4人から話を聞き、兵士側の暴行が発端だったと報告しました。

私も本部で、調査の訓練を約2週間受けました。情報源を守るために実名をノートに書かない。聞き取り内容をパソコンで暗号化して本部に送信し、情報を破棄する。ノートはビリビリに破る。護身術もやりました。

=====

聞き手・花岡洋二 / 「時代を駆ける」は月～水曜日掲載です。

時代を駆ける:土井香苗 / 2 家出...東大3年で試験合格

KANAE DOI

<世界の人権問題に取り組む土井さんが、外国と出会ったのは、中高一貫の桜蔭学園時代のホームステイ経験だった >

小学校時代は漢字を覚えられず、苦労しました。88年に中学校に入ってから英語が苦手でした。どう勉強したらいいのかわからないのです。中学1年の試験の時、学校に向かう電車の中で、はたと、単語を覚えなれないといけないのかと気づき、「やべー」と焦ったことを覚えています。

それが、中学3年と高校1年の夏に英国のエディンバラにホームステイしたのをきっかけに、英語が好きになりました。最初の年は、スペイン、ベルギー、ドイツの子と一緒に。英語でその子たちの話が理解できるのが新鮮でした。日本のことを説明し、「あ、通じた」とうれしく、言いたいことをプツプツと独り言で練習するようになりました。

高1の時(91年)は当時のユーゴスラビア、現クロアチア出身で同い年の女の子と同室でした。帰国したタイミングでユーゴ紛争が始まり、彼女は米国へ1人で疎開。手紙に「寂しい」と何度も書いてきました。ユーゴ問題について、新聞記事を読むようにはなりましたが、どういうことであるかは、分かりな
いまま。自分が「世界」とつながっている実感はわかりました。

< 大学、そして司法試験へと進むが、それは自ら選んだ道ではなかった >

親が厳しかった。怒ると、何に対して怒っているのかも分かりません。妹が怒られている時は自分
ないのでホッとすると、そういう自分に自己嫌悪しました。「勉強しろ」とは言わないけれど、勉強できな
ければ世間から見捨てられる、と思わせようとしているようでした。きつい部活動もダメ。「いい子」でい
るために勉強するしかない。学校でも「明るくて楽しい土井さん」の仮面をかぶっていましたから成績
は良くなった。論理的(説明)ではないですが、東大に入ったのも「仕返し」だと思っていました。

「女はよほど勉強できないと、使ってもらえない。だから資格を」という親の意向で司法試験の勉強を
始めました。大学で馬術部に入りましたが、勉強のじゃまになるからと、やめさせられた。親が亡くなる
夢、自分がマンションから飛び降りる夢を見ました。大学2年の終わり、帰宅すると、自室は木村拓哉
さんのポスターがはがされ、ぐちゃぐちゃにされていました。高2の妹と走って逃げました。家出です。

< 貧乏生活が待っていた >

アルバイトざんまいの日々が始まりました。登戸(川崎市)に下宿を見つけ、南麻布(東京都港区)の
家庭教師先まで交通費が惜しく、(片道約20キロを)自転車で通いました。妹が、安売りでしょうゆや
みりんを買い過ぎて電車賃が無くなり、重い袋を提げて4駅分を歩いて帰ったときは「かわいいやつ
よ」と思い、友達に言い触らしました。

家出したころ、「ピースボート」のボランティアを始めました。世界中の人と交流する船旅を運営するNGO(非政府組織)です。前から興味がありましたが、家出で自由になり、日常生活のサバイバルで少しずつ自信もわき、やっと行動に移すことができたのです。ボランティア1時間当たり乗船料が1000円安くなりました。あの時の苦労は楽しかった。家出前のことは、忘れようとしているのか、あまりよく覚えていないところもあります。

< 96年、東大3年生の時、その年の最年少で司法試験に受かった >

司法試験の勉強が心底嫌で、落ちてもう1年勉強することは耐えられそうにありませんでした。とにかく合格して受験勉強をやめたかった。家出した年の夏に論文試験がありましたが、有料の論文指導講座に通えないので、資料を仲間にコピーしてもらって勉強しました。おかげ様でその年の11月に合格できました。

こんな経験をしたからこそ、弁護士になって、「強い者と闘うぞ」というよりは「弱者に共感する」気持ちが強いのと思います。弁護士になるきっかけを作ってくれた親に、今となっては感謝もしています。

=====

聞き手・花岡洋二 / 「時代を駆ける」は月～水曜日掲載です。

=====

人物略歴

どい・かなえ

国際人権団体「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」日本(電話03・5282・5160)代表。
神奈川県生まれ。97～98年エリトリア法務省調査員。00年弁護士登録。アフガニ
スタン難民弁護団などで活躍。34歳。

毎日新聞 2010年3月2日 東京朝刊

時代を駆ける:土井香苗 / 3 「下から目線」の大切さ痛感

KANAE DOI

< 93年5月にエチオピアから独立したばかりのアフリカ東北部エリトリアで97年5
月～98年5月、同国法務省調査員を務めた >

犬養道子さん(評論家)が書いた「人間の大地」を高校時代に読みました。アジアや
アフリカの難民キャンプのルポで、そこに描かれている不正義に驚き、怒りました。以
後、アフリカ行きを夢みていました。

司法試験に合格してから、NGO(非政府組織)「ピースポート」に相談したところ、エ
リトリアでの法律ボランティアを提案されました。世界一周の船旅を途中下船し、きち
んとした当てもないまま97年3月にエリトリアへ渡り、飛び込みでフォツィア法相(当
時)と面会しました。エリトリアは当時、エチオピア刑法を使っていましたが新刑法を作
る参考として、私が世界各国の資料を収集することが即決されました。

その作業で、首都にあるアスマラ大学の法学部生たちと仲良くなりました。大学は戦争で一時閉鎖され、独立と同時に再開したので、彼らは再開後の1期生で4年生でした。「市民が警察に捕まった時の権利保障は」などと議論していました。人権に燃えていた。全盲の男子学生もいて、何十人もの学生が順に教科書を読んで手伝っていました。

私は世界中の刑罰や検察システム、少年法を調べ、レポートをムサ検事総長(当時)に提出しました。「死刑廃止」の提案も入っていました。

< 一銭ももらわない完全なボランティアだった >

アスマラの家庭にホームステイしたので、生活費はほとんどかかりませんでした。首都周辺の気候は快適で、人々の勤勉さや女性の内気な様子は日本人によく似ていました。しかし大きく違うのは、30年にも及ぶエチオピアからの独立戦争の影響です。その家庭もいったんは英国へ難民として逃れていた。その時に受けた差別など厳しい体験も聞きました。

< エリトリア憲法による国政選挙はエチオピアとの紛争(98年5月~00年6月)などで延期されたままだ >

エリトリアは今、人権侵害国家になっています。当時からイサイアス大統領が権力を握っています。動画サイトで見たインタビューで大統領が、「あなたたちが言うような西洋的な選挙をやる気はない」と答えている。振り返ると、私がいた当時から兆候は

ありました。新聞は国営のみ、テレビも国営1局。インターネットに接続していなかった。法相の下に裁判所が位置づけられていました。

憲法素案は多党制をうたい、上司だった検事総長も各国大使館に選挙法について問い合わせるなどやる気だった。エチオピアとの紛争が転換点だったとも思います。私がナイーブだったという思いもあります。結果的に独裁国家を手伝った。“良いこと”なら何でもいいというわけではありません。ヒューマン・ライツ・ウォッチ(HRW)のような「下から目線」が大事なのです。

<今年1月、うれしい再会があった>

アスマラ大学で親しかった学生の一人、ペトロスさん(仮名)から昨年末、突然メールが届きました。首席で卒業した男性です。HRWの情報を探していて私の名前を見つけ、「米国のワシントンで弁護士をしている」と。米国へ出張の予定があったので再会を約束した。不安もありました。弁護士といっても、エリトリア政府との関係や立場が分かりませんでしたから。

1月に米ニューヨークのHRW本部やワシントンへ出張した際、十数年ぶりに再会しました。政府側の弁護士ではありませんでした。米国に国費留学し、母国に対する反体制集会に出て、留学生資格を取り消されました。恩師らの取り計らいで退学にならず、バイトづくめの生活を送った後、難民認定されました。弁護士アシスタントになり、

さらに弁護士資格をとってパートナー弁護士になりました。今は同胞難民を助けている。美しい話です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

聞き手・花岡洋二 / 「時代を駆ける」次回は8日掲載です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

人物略歴

どい・かなえ

国際人権団体「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」日本(電話03・5282・5160)代表。
神奈川県生まれ。東大3年の時に司法試験に合格。00年弁護士登録。アフガニスタン難民弁護団などで活躍。34歳。

時代を駆ける:土井香苗 / 4 検事の「女性枠」反対に決起

時代を駆ける

KANAE DOI

< 司法試験合格者は司法修習生を経て裁判官・検察官・弁護士などの進路を決める。そのとき検察官採用の「女性枠」があると知り、黙っていられなかった >



東京都千代田区のヒューマン・ライツ・ウォッチ東京オフィスで = 武市公孝撮影

99年春から第53期修習生として、1年半の司法研修を受けました。最初は検事にも興味がありました。人権行政をつかさどるのは法務省人権擁護局の検事です。難民問題に興味があり、スウェーデンで人権救済機関の調査も経験していました。

しかし女性の検事採用は、(70人弱の)各クラスから1人ずつに限る暗黙の「女性枠」があることを知りました。「1人だから、決まっているから」などと教官が普通に話していました。あまりに「当然だ」と提示されると、間違いに気付きません。やがて真っ赤な女性差別だと思うようになりました。

仲間10人ぐらいで、タイ料理屋でお酒も飲んでいる時に、「おかしい」と盛り上がってしまいました。私たちが行動したら無くなる、と思いました。その場で「検察官任官における『女性枠』を考える修習生の会」を結成。チラシを作り、朝、修習生800人の机に置きました。採用率が低いことも調べました。

< マスコミにも出て不当性を訴えた >

改善を申し入れる段になり、毎晩開いていた会議が紛糾。「後からにらまれる」と。先輩たちからも心配されました。その時、仲間の男1人が「正しいことを言うのだから、おれは構わん」と言ってくれ、研修所の所長に1人で申し入れてくれました。カッコいいですね。私と一緒に毎日新聞、朝日新聞やNEWS23にも出ました。「インパクトがあるから」と名前も顔も出しました。

法務省は「女性枠」の存在を一度も認めていませんが、結局、女性の採用は増えました。

学んだことは三つ。コソコソでなく大っぴらにやれば、つぶされない。運動を作ること。草の根運動のように世論を研修所で作りました。なんでも使う。交渉時も新聞記者に取材をお願いしました。弁護士会に依頼したら、実態調査報告書を出してくれました。

<カンボジアの司法支援に加わった上柳敏郎弁護士や木村晋介弁護士、憲法を重視する司法試験指導で知られる伊藤真弁護士、刑事弁護の寺井一弘弁護士らと出会い、「弁護士」という職業を選択することになった。00年10月に登録した>

したくないのに勉強していた期間が長かった。司法試験合格後の勉強が初めて充実していました。

エリトリアでの司法ボランティアの時は、多くの先輩弁護士にお世話になりました。上柳弁護士らのカンボジア支援活動を知り、「こういうこともできるのか」と学びました。伊藤先生が設立した司法試験受験予備校「伊藤塾」で学んだ縁で、日弁連の米国調査団に加えてもらいました。国選弁護の調査で、団長は寺井弁護士でした。オウム真理教の麻原彰晃(本名・松本智津夫)被告を担当する国選弁護人を調整された方で、

世論は死刑を求め、国選弁護人にも脅迫が届いたようです。「最悪」とされる人物でも弁護しなければ、司法制度は成り立ちません。「被疑者弁護という制度を守るために、命がけでも闘う」と、すごい迫力で語られていました。当初は検事も選択肢にありましたが、熱い人たちとの出会いを通じ、「弁護士、いいじゃない」と気持ちが固まりました。

< 夫は「女性枠」問題で共に闘った男性 >

司法修習が終わった2、3カ月後に私から「結婚してください」と頭を下げました。初めは「レーダー外(眼中にない)」だったのに。夫も弁護士で、「日の丸・君が代問題」での処分撤回や刑事、労働問題などを担当しています。人権ゴリゴリで、家でも「他に話はないの？」みたいな感じ。女が飯を作るという発想もない。自宅を新築した際に「台所は要らない」と言い出す始末。さすがに小さい台所は作り、食事も時々作ります。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

聞き手・花岡洋二 / 「時代を駆ける」は月～水曜日掲載です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝

人物略歴

どい・かなえ

国際人権団体「ヒューマン・ライツ・ウォッチ」日本(電話03・5282・5160)代表。
神奈川県生まれ。東大3年時に司法試験合格。00年弁護士登録。アフガニスタン難
民弁護団などで活躍。34歳。

【関連記事】

時代を駆ける:土井香苗 / 5 難民裁判負けたが意義は大

KANAE DOI

< 00年10月に弁護士登録。引き受け手のない外国人の刑事事件が初弁護だった
>

中国人による窃盗事件でした。通訳2人に助けられました。1人の男性は、留置所
に入ったことのある在日中国人で、食べ物は差し入れられないとか、午前中にたばこ
をもらえるとか、“実務”を教わりました。もう1人の女性には、中国の社会背景を学び
ました。被告は中国の中でも貧しい地域の出身でした。生活ぶりを濃密に聞き、なぜ
罪を犯したかを聞きました。同じ空間にしながら、私と彼との間の生まれながらにして
の格差を感じました。有罪判決でしたが、初めて1人の人間の事件を請け負い、正義
感をぶつけました。

< 01年9月11日に米同時多発テロが起き、翌月に米国などがアフガニスタンで開戦。日本では同月、アフガン人の難民申請者9人が突然、東京入管に強制収容される「アフガニスタン難民一斉収容事件」が起きた >

タリバン政権に迫害されて逃れてきた難民申請者が、アフガン人だという理由だけで、家宅搜索され拘束されました。テロ対策といえど何をしてもよいと言わんばかりの人権侵害で、“冤罪(えんざい)”です。20人ほどの弁護団に加わりました。

01年11月、東京地裁が強制収容を違法と決定し、難民は収容所からカトリック教会へ移りました。しかし翌月に東京高裁が決定を覆し、再収容を決めました。難民たちに告げ、事情を説明すると、私が担当していたモハマドさん(仮名)は小さな声で「喜んで従います」と言われました。それだけ私たちを信用してくれていました。自分の足で収容所へ歩く姿を見るのはつらかった。

< 「立てこもり」も検討した >

実は再収容を拒否する「立てこもり」を提案し、弁護団でも議論しました。弁護士と支援者で見守る24時間シフトも決めました。泣き叫ぶ難民を入管職員が引っ張っていく映像は国民に衝撃を与えるはず。国際法(難民条約など)に反した国内の悪法に従う義務はありません。しかし安全に責任を持たないという結論に至りました。

それまで、(アフリカの)エリトリアで難民キャンプを見学したことはありましたが、世界で何が起きているのか、初めて直接触れる機会だったとも感じます。人間の尊厳がここまで踏みにじられているか、と。

< 裁判闘争は負けた >

「大衆的裁判闘争」でした。NGO(非政府組織)と連携し、メディアに訴え、デモをして世論に訴える手法の有効性を知りました。その一方で、国家を変える難しさも知りました。検察の「女性枠」問題では、権力と対峙(たいじ)している実感はありませんでした。無邪気に取り組み、うまくいった。アフガン弁護団は、何十人もの弁護士が何年もかけて全精力を投入しても難しかった。裁判は、結果的に全部負けました。

< 得たものは大きかった >

難民申請者の権利拡大という意味では、無駄ではありませんでした。

瀋陽総領事館に北朝鮮人が亡命を求めた事件(02年5月)を機に、難民認定制度が一部変わりました。難民不認定処分への異議申し立てに対し、新たに設けられた難民審査参与員の意見を聞くことになりました。中途半端とはいえ、処分の実態が初めて第三者の耳にはいるようになった意義は大きいと思います。私たちの事件も影響したはずです。

法務省の中でも、ある程度、思いは共有されていたのだと思います。この10年で難民認定数は増えました。新聞とテレビも国家の大事な課題として取り上げるし、多くの大学生が支援団体に加わり、“自己増殖”しています。アフガン難民問題で激しくやり合った入管職員が、ヒューマン・ライツ・ウォッチでの今の活動を知り、いきなり「新聞で見た」と携帯電話に連絡してきたこともありました。私を「敵」だと思っていたら電話はしてきません。

モハマドさんは今、ドバイにおられます。日本で幸せになるのが一番良かったのですが、「結婚した。子供もいて幸せだ」と聞き、良かったなと思います。当時、(一時的にでも)送還を防いだ意味は大きかったし、日本が良くなるきっかけになると信じています。

時代を駆ける:土井香苗 / 6止 人権外交を“書く”存在に

KANAE DOI

< 弁護士業務を中断して05年9月～06年5月、米ニューヨーク(NY)大学の法科大学院へ留学して国際法修士課程を修了。NY州の弁護士資格も取得した >

「世界の人権侵害を止めたい」という思いはずっと強く持っており、その勉強のために留学しました。

少人数のゼミで体験を共有したのが楽しかった。留学生はみな、母国の豪州、チリ、グルジア、中国などで既に人権や環境問題などに取り組む公益弁護士として経験を積んでいました。私たちより少し若く、弁護士を目指す米国の院生がそれに加わりま

す。

例えば中国人の愛称ジャックさん。北京大学卒業後に「人民のために弁護活動をしたい」という熱い思いで、最初は大連で役人になりました。困窮世帯に住居を提供する部署に配属され法務サービス事業を設立しました。ところが汚職を見つけて変革を訴えると、上司に事業をつぶされました。辞職し、傷心のままの留学です。偉いと思うし、中国で人権派弁護士を務める難しさを実感しました。

< 公益弁護の手法を学んだ >

ゼミの指導教授は、公益弁護が専門。環境問題や人権問題に直面し、弁護士が法廷に立つだけでなく、国会議員や報道機関に働きかけて大衆運動を起こし、役所と交渉して社会を変える手段を研究していました。まさにアフガン難民弁護団のような活動です。

教授は日本と中国の法律に詳しく、水俣病訴訟を分析し、部落解放運動や男女賃金差別訴訟などもよくご存じでした。大学院で、日本の弁護士活動が世界でもすごく高いレベルにあることに気付かされました。日本の弁護士が生活のかなりの部分を割いて被害者とかかわり、全体を救済する運動をしています。

< ヒューマン・ライツ・ウォッチ (HRW) との縁ができた >

NY大を選んだのは、主にフィリップ・アルストン教授の授業を受けたかったからです。国際人権法では随一の学者です。授業は、本物の人権侵害例を取り扱います。「問題が生じている政府へ書簡を書きなさい」という課題が出て、「模範解答」としてHRWの書簡が紹介されることが多いのです。HRWで勉強したいと強く思いました。

< 06年9月～07年7月、HRW本部で活動した >

国際交流基金(東京)のフェローシップ(奨学金)付きで本部のフェローにしてもらいました。「日本国内の人権状況の調査員」として申し込むと、逆に「日本政府などへのアドボカシー(政策提言)担当でなら」と提案されました。その視点に「ほーっ」と思いました。

「日本政府はもっとできる」ということです。大きな人権侵害を無くすには、最も力のある人を動かすと効果的。日本が「力のある人」です。フェローを終えるころに東京オフィス開設の話が持ち上がりました。

< 昨年4月、HRW東京オフィス開設に向けチャリティーディナーを開いた。世界の人権侵害を日本から止める活動が動き出した >

東京オフィス開設が、この1年の最大の成果です。NGO(非政府組織)にはお金集めという大きな壁が立ちほだかります。プロとしての能力とプロダクト(提供できる事業)があり、魅力もあっても、資金が無ければ無駄になります。

開設時の目標は年間2500万円。本部と同じやり方で、ディナーを開くことにしました。テーブル席(8人)100万円、そのほかに1席3万5000円のチケットを用意。企業人の知り合いもほとんどおらず、不安はありました。

司法試験の勉強仲間だった岩瀬大輔さん(ライフネット生命副社長)にお願いしてみました。そして、人々が理不尽な目に遭うことに怒り、同情する心を持つ企業人が多いことを知りました。岩瀬さんが留学した米ハーバード大学ビジネススクールは、企業の社会的責任について教えるそうです。紹介していただいたマネックス証券CEO(最高経営責任者)の松本大(おおき)さんも含め、結局160人がチケットを購入してくださり、目標にほぼ達しました。

私たちは、日本政府の人権外交政策を“書く”存在になりたい。総理大臣が人権危機の現場に行き、その発言が国内メディアだけでなく、英BBCなど海外メディアも注目するような存在にしたい。その時、HRWがメディアに登場する必要もなくなります。
= 土井さんの項おわり

=====

聞き手・花岡洋二 / 「時代を駆ける」は15日から作家・高村薫さんのシリーズを掲載します。

=====

人物略歴

どい・かなえ

ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表。弁護士。神奈川県生まれ。34歳。4月19日、チャリティーディナーをウェスティンホテル東京で開く。チェチェン報道で人権賞受賞のロシア人記者が講演。申し込みはウェブサイト(<http://www.hrw.org/ja>)から。

【関連記事】